［研究論文］

中山間地域における課題と観光教育

島根県雲南市吉田町を事例に

工藤泰子

島根県立大学短期大学部総合文化学科

[ARTICLE]

Present Issues and Tourism Education in Semi-Mountainous Areas: The Case of Yoshida Town, Unnan City, Shimane Prefecture

Yasuko KUDO

Department of Arts and Sciences, The University of Shimane Junior College

しまね
地域共生センター
紀要

Bulletin of Shimane Center for Enrichment through Community, The University of Shimane Junior College

vol.
2
September
2015

島根県立大学短期大学部
松江キャンパス

［研究論文］

中山間地域における課題と観光教育

島根県雲南市吉田町を事例に

工藤泰子
島根県立大学短期大学部総合文化学科

キーワード
観光教育
中山間地域

[ARTICLE]

Present Issues and Tourism Education in Semi-Mountainous Areas: The Case of Yoshida Town, Unnan City, Shimane Prefecture

Yasuko KUDO
Department of Arts and Sciences, The University of Shimane Junior College

Keywords
tourism education
semi-mountainous areas

1 はじめに

本稿は、社会生活上、様々な不利条件を抱える中山間地域における観光教育の例として、島根県雲南市吉田町（旧飯石郡吉田村）[1]で実施した教育内容とその効果について論じるものである。

「中山間地域」の定義は国や自治体により様々だが、「島根県中山間地域活性化基本条例」（平成11年3月制定）[2]および「島根県中山間地域活性化基本条例施行規則」（平成11年3月）[3]によれば、県内いずれの市町村も一部もしくは全部が中山間地域に該当する。

本研究の対象地である吉田町（村）は、かつて、たたら製鉄[4]で隆盛を極めていたが、大正12年（1923）、菅谷たたら閉山後、村の主産業は製炭業へと転換した。しかし、木炭生産も石炭・石油に押され、昭和30年代をピークに出荷量が激減した。重要な収入源を失った人々は村外へ流出し、早くも昭和50年代には人口減少が村の深刻な課題となっていた。このとき、吉田村が過疎対策の切り札としたのが「鉄の歴史・文化」であった。

2 吉田町の現況と課題

1）鉄の歴史・文化を活かした村づくり

吉田村では、現㈱シーズ総合政策研究所会長の藤原洋氏を中心に、有志の集まり「啐啄塾（そったくじゅく）」を形成し（1983）、地域づくりに取り組み始めた。鉄の文化に関する研究活動を重ね、「鉄の歴史村」を宣言（1986）、雇用創出目的に地元農産加工品販売を行う（株）吉田ふるさと村設立（1985）、鉄をテーマとした文化施設の設立など、次々とアイディアを形にして村づくりを行ってきた（工藤2014）。現在も、（一社）鉄の歴史村地域文化研究所ほか、様々な団体を組織し、地域の価値を高める活動を行っている。

2）吉田町の現状

（1）過疎化の進行

表1は、昭和45年（1970）以降の雲南市各町の

人口推移をまとめたものである。平成27年(2015)1月現在、吉田町の人口は1,872人で、これは、45年前と比較して43.07％、5年前から8.59％の減少である。その一方、同一市内には、加茂町(対昭和45年比8.82％減、平成22年比1.20％減)のように緩やかな減少幅の町や、木次町のように、近年むしろ人口増加している町もある。

吉田町は、早くから村(町)づくりに取り組んできたものの、市内のほかの町と比較しても、人口減少幅が大きく、過疎問題の極めて深刻な地であることがわかる。

表1　雲南市町別人口推移(S45-H27)

	S45	H17	H22	H27 1月現在	S45比 (%)	H22比 (%)
大東町	17,094	14,124	13,407	13,113	▲23.28	▲2.19
加茂町	6,835	6,538	6,308	6,232	▲8.82	▲1.20
木次町	11,635	9,648	9,049	9,090	▲21.87	100.45
三刀屋町	9,358	8,241	7,757	7,480	▲20.07	▲3.57
吉田町	**3,288**	**2,163**	**2,048**	**1,872**	**▲43.07**	**▲8.59**
掛合町	5,445	3,689	3,348	3,144	▲42.26	▲6.09

吉田町は市内の他の町と比較しても、人口減少幅が大きい。

資料:雲南市「雲南市人口・世帯数」をもとに作成.
http://www.city.unnan.shimane.jp/www/contents/1200031662493/index.html
(平成27年3月2日閲覧)

(2)入込客数からみた吉田町

島根県の調べによれば、平成26年(2014)の雲南市の観光入込客数は、137.6万人(前年比4.3％減)であった(表2)。

表2　雲南市観光入込客数(延人数)

H24	H25	H26	前年比
966,013	1,438,301	1,376,832	-4.3%

出典:島根県商工労働部観光振興課、2013年、2014年.

平成24年から翌25年にかけて大幅に増加しているが、それは、出雲大社の正遷宮と中国横断自動車道尾道松江線延伸[5]による影響が大きい。平成25年は、出雲市(51.1％増)、松江市(20.1％増)、安来市(21.0％増)と、県東部における入込客数が軒並み伸びたが、雲南市の激増には別の理由も存在する。

表3は吉田町内の主要な観光施設の入込客数である。平成25年3月、中国横断自動車道に道の駅「たたらば壱番地」が開業し、年間40万人を超える集客がある。このことから、雲南市入込客数の急増は、遷宮、高速道路の延伸以上に、同施設への集客効果が反映されたものであることが読み取れる。また、鉄の歴史博物館をはじめ、平成25年は町内ほとんどの施設において入込客数が大幅に増加した[6]。翌26年には前年より減少した施設もあるが、たたらば壱番地開業以前に比べれば入込客数の増加は明らかである。

表3　吉田町内　観光施設入込客数(延人数)

	H24	H25	H26
道の駅たたらば壱番地	−	448,397	415,249
芦谷峡・やまめの里	3,717	4,311	4,250
鉄の歴史博物館	3,500	6,543	4,336
鉄の未来科学館	1,494	1,946	1,497
山内生活伝承館	3,479	1,746	2,151
吉田グリーン・シャワーの森	1,972	2,287	2,563
出雲湯村温泉 清嵐荘*	93,799	92,413	87,009

*出雲湯村温泉(旧木次町)と清嵐荘(旧吉田村)の入込延数を合算.
出典:島根県商工労働部観光振興課、2013年、2014年.

しかしながら、筆者はこの2年間、町の人から「高速道路のICから町内に人が流れてこない」、「(今まで一般道から町に立ち寄っていた人が、高速道路で素通りしてしまうため)むしろ観光客が減少した」、「町民は高速道路の恩恵を受けていない」といった声を、度々聴いてきた。このことは、町内施設の入込客数が増加しているとはいえ、圧倒的な集客力を誇る施設(たたらば壱番地)に比して、町内への集客効果が比例していないことが、「恩恵を受けていない」という感覚を引き起こしているものだと考えられる。また、従来、町内で消費されていた来訪者の購買行動(飲食含む)が新しい施設に向いたこともある。

3 教育上の課題

1）観光教育の目的

観光教育の目的は、二つに大別できる（安村1995）。一つは、観光による多様な効果・影響を理解し、自らの観光行動を考えるよき観光者の育成。もう一つは、観光事業に関わる人材の育成である。

従来、観光の人材育成といえば、宿泊、旅行、運輸等のサービス産業を見据えたものであった。しかし、2000年代以降、我が国では「地域」をキーワードとした観光教育が相次いで導入され（拙稿2015a）、今日では公務員、NPO、ボランティアガイド、まちづくり系会社、調査研究機関等、広く地域づくりに関わる観光の人材育成が求められている。

2）学生の旅行経験

筆者が島根県に赴任して驚いたことの一つは、学生の旅行経験が非常に少ないことである。某バラエティ番組[7]で取り上げられたが、県内公立高校の多くで修学旅行を実施していない。また、大学等での研修旅行以外、ほとんど旅行したことがない学生も多い。

（公社）日本観光振興協会（2014）の調べでは、18－19歳人口の60.8％が過去1年間に宿泊旅行の経験がある。それに対し、同年代の本学学生では、「1年に1回以上宿泊旅行をする」のは、およそ35％であった[8]。設問が若干異なるが、この差は非常に大きい。さらに、自家用車移動が中心のため、公共交通機関を利用する機会が極端に少ない[9]。

今日、グローバル化の進展、情報量の増加などで、プロ顔負けの知識を持ち、旅行経験の多い観光者が増加している。そのような成熟した観光者を迎える上でも、人材育成と観光者育成の双方向からの観光教育が重要である。

3）教育現場における課題

2年制短期大学では、ゼミ活動期間が1年であるため、一つの地域を深く学ぶことは難しい。また、本学では学外見学会を実施している授業が多数あり、各担当教員と地域、あるいは、大学と地域との連携は継続しているものの、学生の訪問は一度きりで終結してしまう場合が多い。

これらの課題をふまえ、筆者は1年次講義科目「観光資源学」に地域に関する基礎的学習の時間を設け、2年次の「卒業プロジェクト（観光文化ゼミ）」で展開・充実させるという2年間通した取組みを実施した[10]。

教育現場と地域の、双方の課題と取組みの関係は、図1である。

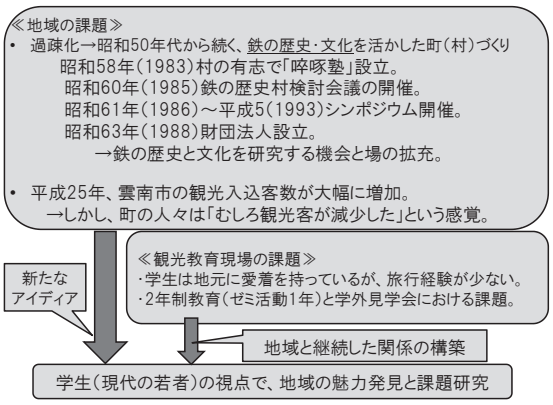


図1　教育現場および地域の課題と本取組みの関係

4 平成26年度　観光文化ゼミ（卒業プロジェクト）での取組み[11]

1）ゼミの活動内容

全員共通の活動と並行して、各自（または2人組）が設定したテーマに基づいて研究に取り組んだ。

共通の活動は、吉田町がこれまで大切に育ててきた「鉄の文化」の学習から始めた。県教育委員会による国庫補助事業の成果、『菅谷鑪』（1968）の読み合わせと同時に、関連文献の収集・講読を通して、吉田町および鉄の文化に関する知識を深めた。

また、子安観音祭（5月3日開催）とゼミ合宿（9月11－12日）において、全員でフィールドワークを実施した（表4）。

表4　平成26年度　観光文化ゼミの内容

時期	全員共通の活動	個人テーマに基づく研究
4月	吉田町・鉄の文化についての学習（座学） 『菅谷鑪』を読む	関心のあるテーマ設定 資料収集・文献調査
5月	子安観音祭見学会① 祭見学と和菓子作り	聞き取り①
9月	吉田町（および掛合町）ゼミ合宿②	聞き取り② 以後、各自アポイントメントをとり、ヒアリング調査
11月	1年生に吉田町の魅力を伝える③	
2月	卒業発表会（平成27年2月7日） 報告書作成	

2）子安観音祭見学会と和菓子づくり

（1）子安観音祭

子安観音祭は、毎年5月3日、6歳になる子どもたちの稚児行列が吉田町保育所前から本町通りを練り歩き、吉田公園（彫刻家・内藤伸の設計）



写真1　本町通りを練り歩く稚児行列



写真2　祭当日の本町通りの家の様子
各家庭では縁側に「お宝」を並べ、来訪者を楽しませている。ひな人形を並べる家庭が多いが、民芸品なども展示される。

の観音様に成長祈願をする町最大の祭事である。今日では、町内在住の子どもの数が減少したことで、町外からの参加者が多い（写真1）。当日は、本町通りに面した家々が、それぞれの家庭の「お宝」を誇らしげに展示して来訪者を楽しませるなど（写真2）、町全体が祭で盛り上がる。

（2）町の人々との交流と学生の反応

祭当日の昼、吉田町在住の福丸幸子さんに地元の野菜を使った料理をご馳走になり、食後には椿の葉を使った和菓子づくりを教わった（写真3）。



写真3　和菓子づくり体験
福丸さんには美味しい手料理までご馳走になった。

学生の感想文（一部抜粋）は次のようなものであった（下線部、引用者による。以下同じ）。

- 私は今回で吉田町を訪れるのが2回目だったので、早くも懐かしさを感じました。
- 吉田公園内の休憩所では、観光協会の方や市議会議員の方から、昔、町で大火事が起った話や、田部家について興味深いお話を聞くことができ、今後、もっと吉田について調べていきたいと感じました。
- 今回、一番驚いたのは、吉田町のみなさんがとても気さくに話に応じてくれたことでした。（中略）お昼をごちそうになった福丸さんのお宅では、こんなに大人数で押し掛けたにもかかわらず、食べきれない程のたくさんのお料理でもてなして頂き、とてもうれしかったです。しかし、こんなにおもてなしを頂きながら、私は勉強不足で、地域の方に初歩的な質問をぶつけてばかりでした。これからの一年で、吉田についてもっとしっかり勉強して挑まなければいけないと反省も多い見学会でもありました。

- 鉄の歴史村地域文化研究所の方々と散策した際には、細い道にもとても趣があることがわかり、自分一人でものんびり散歩してみたいと思いました。また、よくお話は伺っていたものの、一度も見たことのなかった田部家の御屋敷には驚きました。（中略）茶室も含めてまだまだ見どころがあるような気がしたので、これからもっと見学して、体験して行きたいです。
- （地域の方との交流を体験して）このように、ただ観光するよりも地域の方と直接ふれあえた方が思い出に残るのではないでしょうか。

1年次では、事前に講義を受けていたものの、基本的には担当教員の引率について回るだけの受け身の見学会であった。しかし、今回は事前学習を重ねてきたこともあり、ゼミ学生の方から積極的に町の人々に話しかけ、聞き取り調査を行っていた。さらに、前回訪問の際にお世話になった方と偶然再会したことで、学生にとっては、まだ2度目の訪問にも関わらず、吉田町が「懐かしさを感じる町」、「知人のいる町」へと変わっていた。また、自分自身の「勉強不足」への気づきがあり、地域に関する学習意欲がさらに高まっていた。

3）吉田町および掛合町ゼミ合宿

9月11―12日、1泊2日のゼミ合宿を実施した。合宿の計画立案時、後述の1年生向けに実施する学外見学会（11月実施）を見据え、鉄の歴史・文化にこだわらず、学生の視点で、自由に訪問先を考えさせ、以下のスケジュールに決まった（表5）。

表5　ゼミ合宿のスケジュール

1日目	午前：㈱吉田ふるさと村　講義・視察 講師・案内　石原秀寿氏（観光事業部主任） 午後：吉田町の方からお話を聞く （吉田町在住女性4名） 宿泊：グリーン・シャワーの森
2日目	午前：「鉄山師の町歴史館」見学 案内：高木朋美氏（鉄の歴村地域文化研究所理事） ボランティア活動 兎比神社参拝 午後：龍頭の滝見学 掛合酒造資料館見学　案内：竹下三郎社長

㈱吉田ふるさと村は、1年次の見学会の際、町内の施設で高岡社長から講義を受けた。今回は、会社を訪問し、観光事業部の石原氏からお話を聞き、作業現場も視察させていただいた（写真4）。また、前回、見学として訪れた「グリーン・シャワーの森」に宿泊する計画を立てた。同じ場所、同じ会社に異なる角度からアプローチすることで、学生の理解・関心が深まった。さらに、5月にお世話になった福丸幸子さんほか、吉田町の方々からお話を聞く時間を設けた。同じ人々と交流することで、「一度きりではない」関係の構築を目指した。



写真4　吉田ふるさと村の視察

2日目は、翌日、吉田町で開催されるイベント[12)]の会場設営の手伝いをした。会場は昭和12年（1937）築の旧吉田小学校講堂で、奉安殿が残る貴重な建造物である（写真5）。この建造物も、あまり大きく宣伝されることはないが、町の有力な観光資源である。



写真5　イベント会場設営のボランティア
後方左は奉安殿。後方やや右には田部長衛門氏の肖像画が残る。

ゼミ合宿の帰路はあえて高速道路を利用せず、松江・吉田間にある掛合町の観光資源を取り入れることで、広域的な「線」・「面」としての観光の可能性を考察した(写真6)。



写真6　掛合酒造資料館見学

合宿後の学生の感想文(一部抜粋)は次のようなものであった。

・町の方からの聞き取り調査では、調べるだけではわからなかった吉田村の歴史や風習について聞けました。古い史料の現物を見せてもらえたのが一番勉強になりました。今回の視察や調査では、きちんと調べた上で実際に現地調査に行くことの意味を実感しました。
・(掛合酒造資料館を見学して)タレントのDAIGOさんに親近感がわきました。飾ってあるサインは若い人たちも喜ぶし、お酒は男女年齢問わずあらゆる人が興味を持つと思います。場所が目立たないため、島根県民でも知らない人も多いと思いますが、ツアーの時にここを入れると驚く人もきっと多いと思います。今回訪問した場所全てに魅力を感じ、帰宅後、自分の家族や友達にたくさん話をしました。このように私たち若い世代が積極的に動けば口コミだけでもすぐに広まるし、龍頭の滝に関しては、早速「連れて行って」と友達に言われました。
・今回の合宿では、文献調査だけでなく、実際に吉田の方々から話を聞くことでよりリアルな情報が得られたと思いました。
・今回で吉田町は三度目の訪問になりますが、訪れるたびに吉田町の新しい側面を観察することができて楽しかったです。
・(吉田町の方から山内で開催されたお祭りの話を聞いて)当時は祭りになると高殿が劇場のような場所になり、歌舞伎が上演されていたという面白い話も聞けました。私の研究テーマについて知るには、もっと別の場所での調査も必要だとわかり、いろいろと学ぶいい機会になりました。この合宿の経験を、しっかり研究に活かすようにしたいです。

訪問回数を重ねるごとに、町への関心が高まり、町の魅力を新たに発見している様子がわかる。さらに、吉田町だけでなく隣接町の酒造資料館や龍頭の滝など、島根の魅力に改めて気づいたようだ。同時に、タレントのDAIGOさんへの関心や、SNSを利用した情報発信力など、若い学生の感性や現代的コミュニケーション・ツールの活用など、新たな可能性も見えてきた。これらは、一度きりの学外見学会では得られない教育の効果である。

4)1年生に吉田町の魅力を伝える

これまでの学習をふまえ、観光文化ゼミ生が、学生の視点から1年生に吉田町の魅力を伝える機会を設けた。

(1)平成26年度「観光資源学」(1年生後期選択科目:履修生48名)における取組み

11月12日　「山陰の観光資源―鉄の歴史村」
(担当教員による講義)
11月19日　「鉄の歴史村地域文化研究所の取組み」
(外部講師による講義　高木朋美氏)
11月26日　「学生から見た吉田町の魅力」
(観光文化ゼミ生による説明時間を30分設けた)
11月29日(土)　吉田町見学会　希望者のみ
(観光文化ゼミ生企画・実施)

同授業で、平成25年度にも吉田町に関する講義と見学会を実施したが、今回、学生の視点を取り入れたことが大きな違いである。人前で説明するには、「わかった(つもり)」、「知っている(つもり)」ではなく、自ら学習を重ね、記憶を定着させ、内容を理解しなければならない。さらに、内容を聴き手に伝える(伝わる)ための工夫も必要である。学生が着目した事柄、考えた説明方法をいくつか紹介

したい。

①たたらば壱番地について説明した学生
- 「秘密結社鷹の爪」の「吉田くん」のプロフィールの紹介から説明を開始。

②菅谷高殿について説明した学生
- 施設長の描いた絵を高殿の魅力の一つとして紹介。

③鉄の歴史博物館について説明した学生
- 「鉄の文化」よりも、博物館の建物（旧医院）に着目して説明。

上記はゼミ学生による説明方法の一部だが、これまで「鉄の文化・歴史」や「町づくり」という切り口の授業に関心を示さなかった学生も、「先輩の話を聞いて、吉田町に関心を持てた」、「先生の授業より面白かった」という感想を述べていた。

(2)学生企画の見学会の実施

11月29日（土）、希望者を募り、学生企画・運営の見学会を実施した。

見学会の訪問先

午前	鉄山師の町歴史館 鉄の歴史博物館 菅谷たたら山内（菅谷高殿、山内生活伝承館）
午後	本町通り散策 道の駅「たたらば壱番地」 掛合酒造資料館

参加学生　1年生2名、2年生8名

訪問先だけをみると、特別な企画には見えないだろう。しかし、バス車内で学生が見学箇所の説明をし（写真7）、文献調査で得た知見をもとに参加者全員が赤いリボンを身につけるというアイディアを取り入れるなど（写真8）、学生目線のオリジナルの見学会であった。

また、これまでの訪問経験をふまえ、各訪問先での滞在時間を長めに設定し、帰路は一般道路を利用することで掛合酒造資料館の訪問を取り入れた。



写真7　車内では学生が見どころを説明[13)]



写真8　伝承を観光に活用する[13)]
文献調査で得た知見をもとに参加者全員が赤いリボンを身につけることを提案（発案者：岡本優花）

5）卒業プロジェクト発表会・報告書作成

個人またはペアグループで設定したテーマに基づく研究では、それぞれ吉田町ほか関連地域でのフィールドワークを行い、卒業プロジェクト発表会（平成27年2月7日）で報告し、報告書にまとめた（工藤2015b）。テーマと概要は次の通りである。

(1)作業着から鉄の町「吉田」をみる

［概要］かつて、たたら場で着用されていた藍染めの作業着と町内の藍染業の発展を調査し、藍染め文化の観光への活用を提案。

(2)仕事唄の伝承について

［概要］他所での仕事唄の伝承方法について調査し、「たたら唄」を次世代に継承する方法を考察。

(3)吉田町の金屋子信仰を観光に活かすために

［概要］金屋子神の伝承を調べ、赤不浄が禁

忌とされた一方で、赤色を身につけていたという説を活かし、学生企画の見学会において、参加者全員が赤いリボンを身につけることを提案。

(4)金屋子神の観光資源としての可能性

［概要］金屋子神社（安来市）の見学会に参加し、主催者に許可を得た上で参加者対象にアンケートを実施。広域的な観光の可能性を考察。

(5)吉田ふるさと村をわたしたちの‘ふるさと’に

［概要］㈱吉田ふるさと村主催イベントにボランティアとして参加。複数部署の社員から聞き取り調査を実施。

(6)寺の新たなあり方を考える

［概要］長寿寺と地域との関わりを調査し、過疎地域における寺を観光に活用することを提案。

(7)雲南市吉田町の魅力を若者に

－ツアーを実施して－

［概要］ゼミ生の意見をとりまとめ、見学会を企画・実施。

5 終わりに

観光のまなざしは、社会集団、年齢、時代など「差異」から形成される（アーリ2014）。今回の取組みを通して、長年、吉田で生活してきた人々と、地域をよく知らない若者（学生）とでは、地域に向けるまなざしが大きく異なることが明らかになり、同時に、資源活用のアイディア、情報発信の方法など、新しい可能性も見えてきた。また、本取組みは吉田町を対象に始めた活動だが、隣接町の資源を組み合わせた広域的な「鉄プラスα」の観光を考える必要性も見えてきた。学生企画の見学会では1年生の参加者が少なく、十分な反応を得ることはできなかったが、ゼミ学生にとっては観光資源の活かし方、資源のPR方法、さらに、観光欲求を喚起させること自体の難しさなど、本取組みを通して多くのことが学習できた。また、教育の場として同じ場所に複数回引率することで、学習意欲の向上という効果も改めて実感した。

「観光者の育成」という課題についても、座学・フィールドワークを通して、観光が地域に与える影響・効果を習得し、「よき観光者」として責任ある行動をとることができた。

地域の抱える課題（交流人口増）については、見学会実施以前に吉田町を訪れたことが無かったゼミ生全員が、教育活動の場として何度も訪問した。学生に好評だった龍頭の滝（「日本の滝百選」の一つ）も、合宿を実施しなければ、訪れる機会が一度もなかったかもしれない。同じ場所を繰り返し訪問することで、学生たちにとって吉田町が特別な地となると同時に、隣接町の魅力にも気づく機会となった。自ら友人や家族を連れて町を案内するゼミ生もいた。

また、後日、聞き取り調査の際にお世話になった吉田町の方から、「学生さんと話せて楽しかった」、「孫を県短（本学）に入学させたい」といった声もいただいた。観光振興には、地域の人々にアイデンティティの形成を促し、誇りや生きがいを創出する効果もある（工藤2003）。地元の反応からも、本観光教育によって、大学・学生と地域とのつながりが深まり、双方への効果がうまれた。したがって、この取組みは、僅かではあるが、地域課題解決の糸口になり得ることがわかった（図2）。

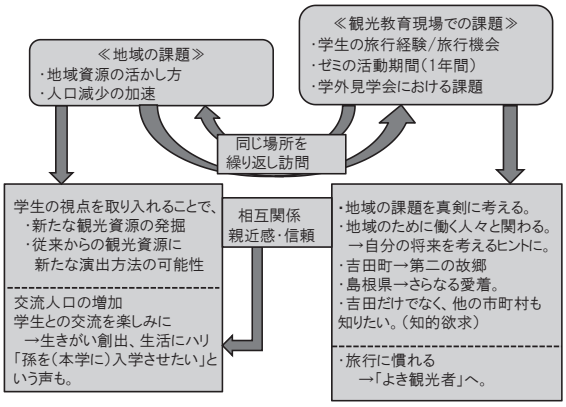


図2　本取組みの効果

謝辞

本事業では、藤原洋様［㈱シーズ総合政策研究所会長］、高木朋美様［㈳鉄の歴史村地域文化研究所理事］、高岡裕司様［㈱吉田ふるさと村社長］、石原秀寿様［同社観光事業部主任］、朝

日光男様［㈶菅谷高殿・山内生活伝承館施設長］、竹下三郎様［㈱竹下本店社長］、初花様、福丸幸子様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

付記

本稿は、平成27年度しまね地域共育・共創研究助成金（地域活動経費）を受けて実施した事業成果の一部である。

本稿の一部は、第29回日本観光研究学会全国大会にて口頭発表を行った。

注

1） 平成16年（2004）、飯石郡吉田村、三刀屋町、掛合町、大原郡大東町、加茂町、および、木次町の隣接6町村が合併し、雲南市が誕生した。本稿では、合併前を「吉田村」、合併後を「吉田町」と表記する。
2） 本条例では「産業の振興、就労機会の確保、保健・医療・福祉サービスの確保その他の社会生活における条件が不利で振興が必要な地域」を「中山間地域」とする。
3） 本規則では、①過疎地域（過疎地域自立促進特別措置法で指定）、②特定農山村地域（特定農山村法で指定）、③辺地地域（辺地にかかる公共施設の総合整備のための財政上の特別措置に関する法律で指定）、④これらと同等に条件が不利である地域（知事が告示）のいずれかに該当する地域を「中山間地域」と定義する。
4） 原料となる砂鉄を木炭の燃焼によって還元し、鉄や鋼を得る我が国独自の製鉄法。
5） 通称「やまなみ街道」。平成27年3月には尾道松江間が全通し、さらなる集客効果が期待されている。
6） 山内生活伝承館が減少しているのは、同年11月まで、国の重要有形文化財の菅谷高殿が修復中であったため。
7） 日本テレビ「月曜から夜ふかし」2013年4月22日放送。
8） 筆者の担当する「現代観光学入門」（1年生前期文化資源学系必修科目）履修生51名対象。「1年に1回以上宿泊旅行をする」と答えた学生は18名（35.3％）であった。51名の内訳は、島根県在住43名、鳥取県5名、その他3名。集計は観光文化ゼミ生（2年生）による。
9） 観光関連科目を受講した松江市出身の学生は、本学入学後、初めて一人で公共交通機関（市バス）を利用したという。それまで18年もの間、電車、バス、一度も自分で料金を支払って乗車した経験がなかったのである。
10） 「観光資源学」（1年次後期選択科目）において、吉田町に関する講義時間（担当教員および外部講師招聘）を取り入れ、正規授業時間外に希望者を対象とした学外見学会を実施した。これらの学習をふまえ、吉田町に関心のある学生たちが、2年次の観光文化ゼミ（卒業プロジェクト）を自ら選択し、深い学びへと発展させた。詳細は拙稿（2014）参照されたい。
11） 取組みの詳細は、工藤編著（2015b）を参照されたい。
12） 「鉄山師の町歴史館」オープニングイベントとして開催されたピアノコンサート。
13） 写真7・8は、本人の承諾を得た上で掲載した。

引用文献

- アーリ、ジョン／ラースン、ヨーナス. The Tourist Gaze 3.0,（加太宏邦訳. 観光のまなざし. 法政大学出版局）, 3-4, 2014.
- 工藤泰子. 観光振興と地域住民. 山上・堀野編著， 現代観光へのアプローチ， 白桃書房,1－15, 2003.
- 工藤泰子. 雲南市吉田町における観光教育. しまね地域共生センター紀要, 1:53-62, 2014.
- 工藤泰子. 我が国の観光教育機関についての史的研究. 日本国際観光学会論文集， 22：13－20, 2015a.
- 工藤泰子編著. 学生の視点を活かした観光振興の可能性を探る―雲南市吉田町を事例に―， 平成26年度しまね地域共育・共創研究事業成果報告書（学内配布報告書）, 2015b.

- 島根県教育委員会．菅谷鑓．島根県教育委員会（1990年復刻版、島根県文化財愛護協会),1968.
- 島根県商工労働部観光振興課．平成25年島根県観光動態調査結果, 2013.
- 島根県商工労働部観光振興課．平成26年島根県観光動態調査結果, 2014.
- 日本観光振興協会．観光の実態と志向（第32回）, 84, 2014.
- 安村克己．観光と教育・福祉．前田勇編，現代観光総論，学文社， 141－150, 1995.

参考URL
雲南市．雲南市人口・世帯数，
http://www.city.unnan.shimane.jp/www/contents/1200031662493/index.html
（平成27年3月2日閲覧）

受付：平成27年6月19日　受理：平成27年7月24日

しまね
地域共生
センター

Shimane Center
for Enrichment through Community,
The University of Shimane
Junior College

島根県立大学短期大学部
松江キャンパス

文部科学省
地(知)の拠点